

大古墳展Ⅱ 展示解説シート

～坂戸台地の古墳文化～

はじめに

坂戸市西部（入西・^{につさい}大家地区）の古墳時代について取り上げた昨年度に引き続き、今年度は坂戸市東部（坂戸・^{すぐろ}勝呂・^{みよしの}三芳野地区）の坂戸台地上に展開する古墳時代の集落・古墳についてご紹介します。

広範囲にわたって高い密度で古墳や集落が展開する毛呂台地^{もろ}に対して、坂戸台地における古墳時代の動向の特徴として、谷状地形や河川流域によって分けられる小地域ごとに大きく様相が異なるという点が挙げられます。本展示では、坂戸台地を4つの小地域に分け、それぞれの古墳時代の様相を探っていきます。

また、今年度は新たな趣向^{しゅこう}として、4つのセクションを学芸員がそれぞれ担当し、独自の切り口で紹介しています。4人の学芸員の異なる視点・趣向をお楽しみください。

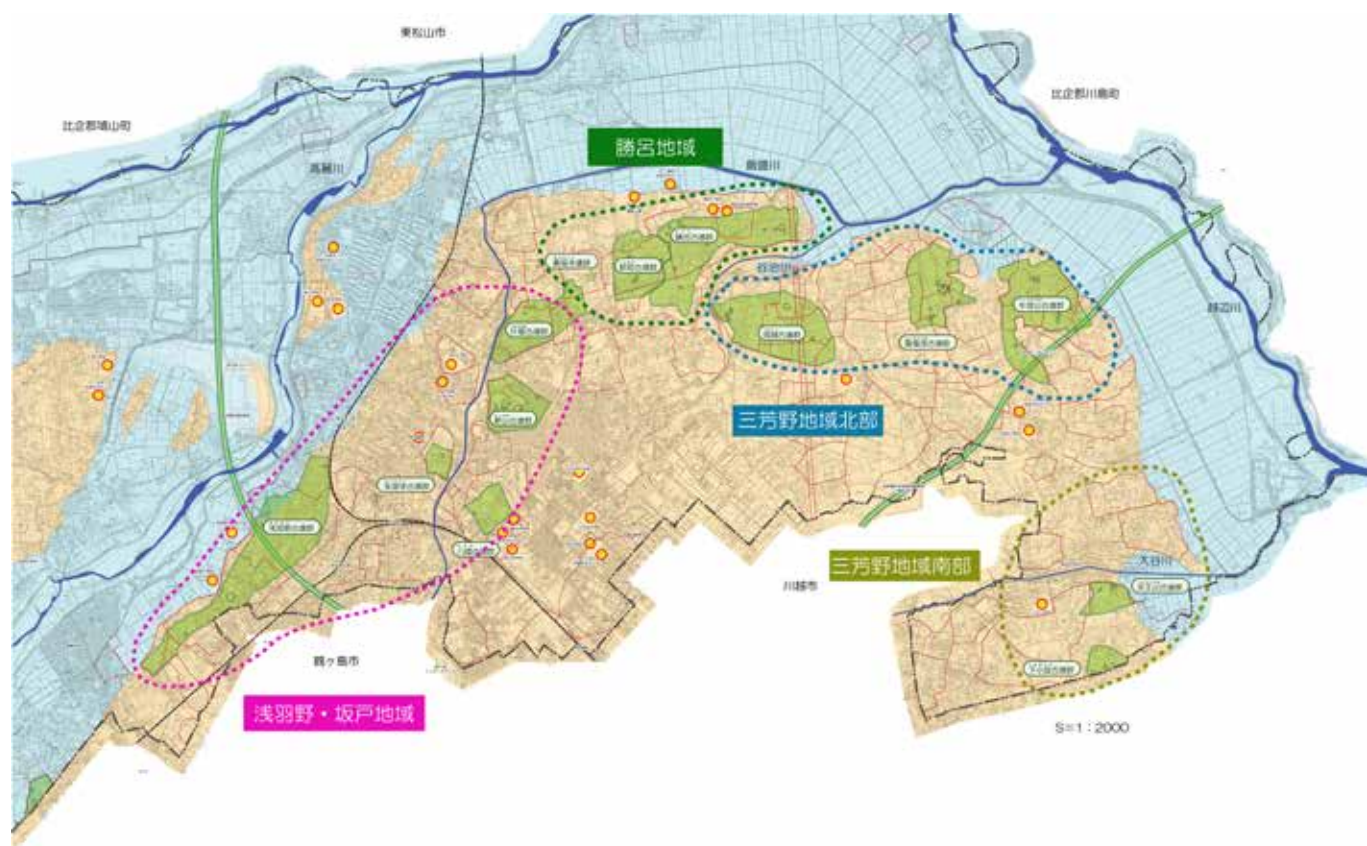


図1) 坂戸台地上の4つの小地域と古墳群の分布

あさばの 浅羽野・坂戸地域 ～古墳のない古墳時代～

おっぺがわ 越辺川との合流地点にほど近いこまがわ 高麗川南岸の一带は「浅羽野」と呼ばれ、その初見はあさばの 奈良時代の『万葉集』まで遡ります。本地域における古墳時代の特徴をひと言で表すとすれば、「古墳が（ほぼ）ない古墳時代」と言えるでしょう。

古墳時代前期（約 1,650 年前）には弥生時代以来の墓制である方形周溝墓の造営が長く続きますが、多くの地域ではその後古墳が築かれるようになる一方で、浅羽野・坂戸地域では集落がまばらに営まれるのみで、確実な古墳の出現は古墳時代終末期（約 1,350 年前）を待たねばなりませんでした。古墳時代の大半を通して、本地域には古墳が造営されなかったのです。このような状況は、高麗川対岸の^{につさい}入西地域や、同じ坂戸台地の東側に位置する諸地域とは大きく異なっています。

では、古墳が（ほぼ）存在しなかった地域社会は、古墳を造営する外部の社会と無縁だったのでしょうか。方形周溝墓や集落から出土する土器、終末期になって現れる古墳の動向から、この問いについて探ってみましょう。

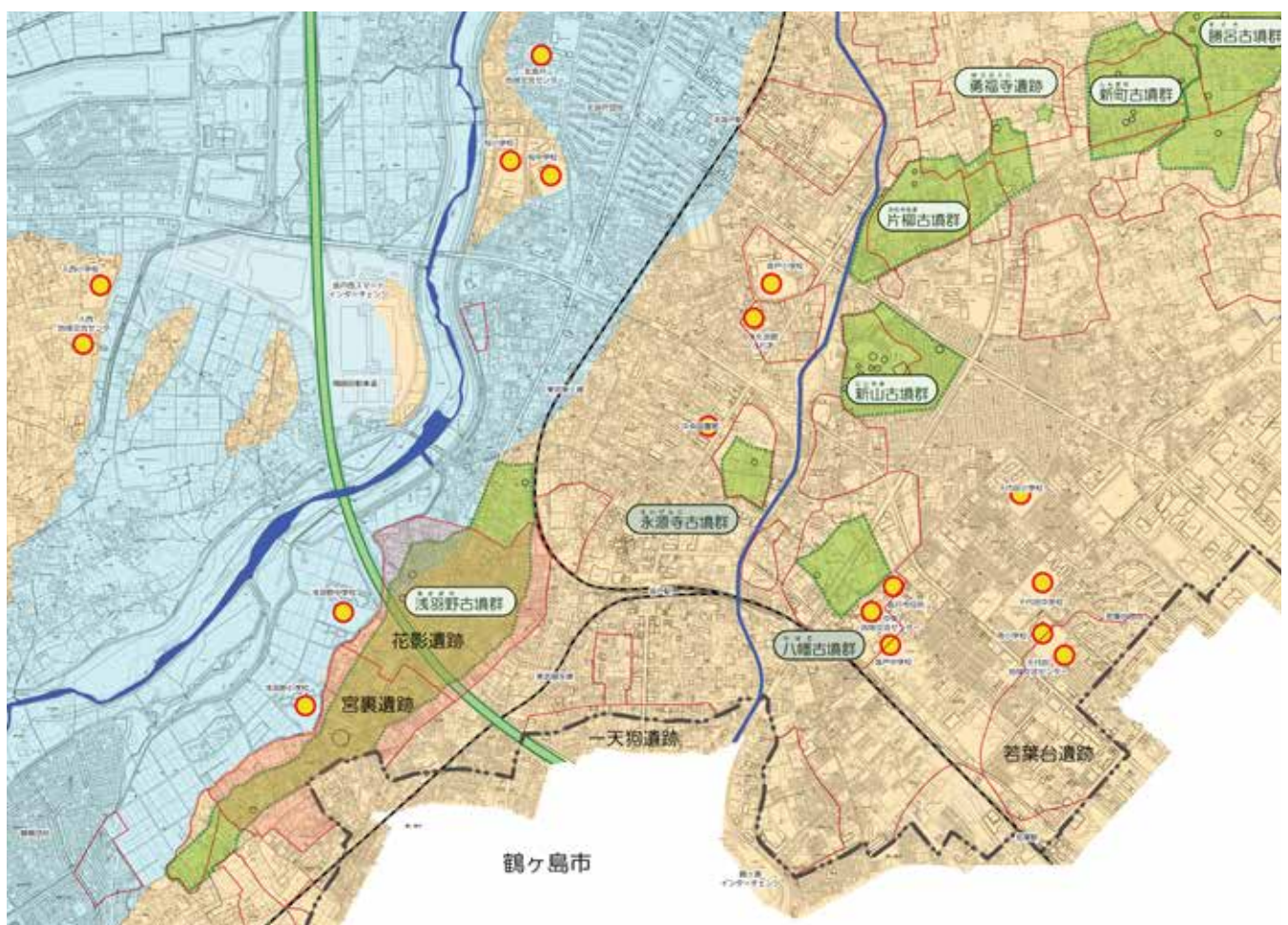


図2) 浅羽野・坂戸地域の集落・古墳の分布（ここでは紹介しないものも掲載しています）

土器でつながる社会

はなかげ みやうら
花影遺跡・宮裏遺跡における動向を見てみる

と、最も人々の活動が盛んになった古墳時代前期の前半（約 1,650 年前）には、多くの住居・
ほうけいしゅうこうぼ
方形周溝墓から南関東系を中心とした外部の社会

にルーツをもつ土器（^{がいらいけい}外来系土器）が出土するよ 図3）南関東からの影響を受けた土器の文様
うになります。この時期、^{きない}畿内のヤマト政権成立による影響を受け、東海地方を中心に
土器や人が一挙に^{ぜんぽうこうほうふん}関東地方へと流入し、前方後方墳の導入など様々な影響を及ぼしまし
た。本地域では、主に南関東を経由し、間接的に東海地方の影響を受けたようです。外
来系土器の存在は、古墳を^{ぞうえい}造営する外部社会との密接な交流を物語ります。

ちくぞう 古墳築造を通した交流

古墳時代終末期（約 1,350 年前）に至って、浅羽野古墳群・新山古墳群といった
よこあなしきせきしつ ^{ちくぞう}
横穴式石室を持つ終末期古墳の築造が始まります。これらの古墳の石室を比較してみると、
と、近隣の古墳群の石室と共通する点も多く、^{すぐろ}勝呂地域との境界まで広がる^{かたやなぎ}片柳古墳群
や、さらに東側の勝呂地域に広がる古墳時代後
期に^{さかのぼ}遡る古墳・集落を営んだ集団との交流を通
して、古墳の築造技術や文化を取り入れていた
ことが^{うかが}伺えます。これらの古墳を築いた人々は、
新たな^{りつりょう}律令社会の中で^{かんじん}官人として地域の中心を
担っていたようです。

りつりょう 律令社会への転換

集落・方形周溝墓から出土した土器や、古墳築造の動向を通して浅羽野・坂戸地域の
様子を探ってみると、古墳が（ほぼ）ない地域社会も、決して古墳を造営する外部の社
会と無縁ではなかったことが分かります。その後、律令制度が確立された奈良・平安期
に入ると、集落の中心は^{わかばだい}若葉台遺跡・^{いってんぐ}一天狗遺跡といった坂戸台地のより内陸部へ移動し、
浅羽野の地は『万葉集』に^{うた}詠われたまさに「野」の景観へと還っていきます。



図3）南関東からの影響を受けた土器の文様

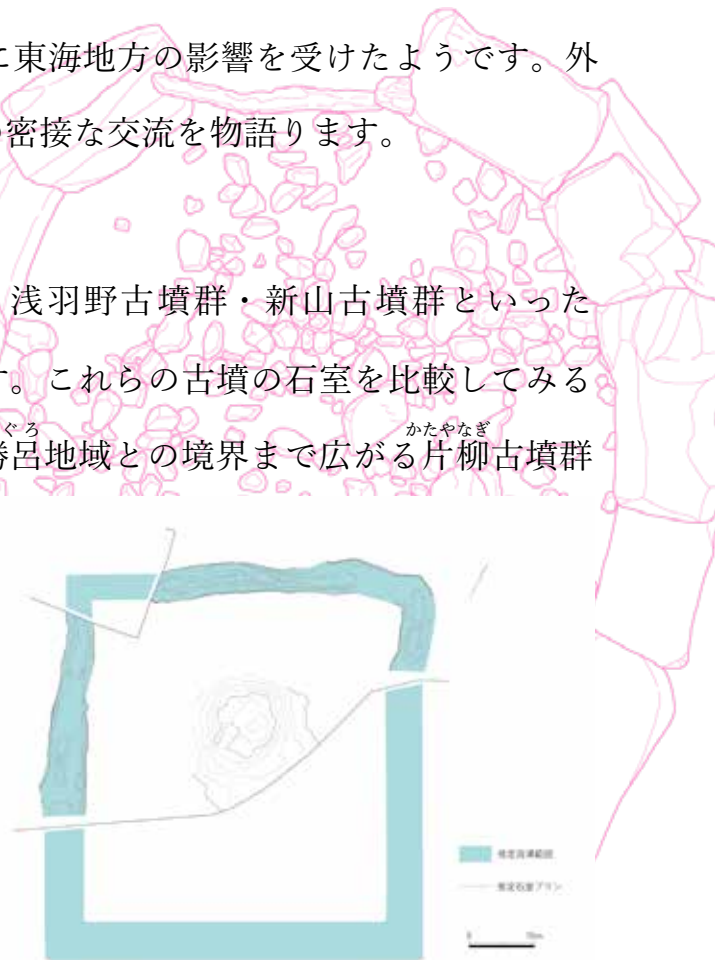


図4）坂戸市を代表する終末期古墳 新山2号墳

すぐろ 勝呂地域 ～しゅちようふん けいふ 首長墳の系譜を追う～

すぐろ 勝呂地域は坂戸市の北東部に位置し、付近には越辺川や飯盛川、谷治川といった河川が流れ、私たちに自然からの^{おんけい}恩恵をもたらしています。『勝呂』という地名の由来は定かではありませんが、平安時代末期には勝呂郷（現在の勝呂地域一帯）を平良文流山口氏が本拠とし、勝（須黒）氏を称したとされています。勝氏は武蔵七党の内の村山党に属し、その名は鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』にも登場します。

古墳時代の勝呂地域については、これまでの発掘調査の成果から実像が明らかになりつつあります。古墳時代前期（約 1,650 年前）では坂戸台地の縁辺部周辺に^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が造られます。前期の墓制の中心は伝統的な方形周溝墓であり、^{ぜんぼうこうえんふん}前方後円墳などの大型古墳は造られませんでした。古墳時代前期が終わり中期に入ると、集落やお墓の痕跡が消え、人々の営みが一旦途切れます。その後、古墳時代後期（1,500 年前）になると^{くうかんち}空闲地であった勝呂地域周辺に大型古墳の築造が始まり、それに付随する中小円墳の築造と相まって、一気に古墳密集地帯へと^{へんぼう}変貌を遂げます。

このような変貌を遂げる勝呂地域について、古墳時代後期に焦点を当てて、古墳文化をご紹介します。



図5) 勝呂地域の古墳の分布

首長墳の築造

古墳時代後期（約 1,500 年前）の坂戸台地上では、首長墳とも言うべき大型古墳が築造されました。首長墳とは、地域を治めた豪族^{ごうぞく}の墓を意味し、勝呂地域周辺において数代にも渡り築造されています。勝呂地域に限ると、入間郡内^{いるまぐん}で 1 番の大きさを誇る^{どうやま}洞山古墳、直径 50 m を超える大型円墳の勝呂神社古墳^{すぐろじんじゃ}が築造されました。この 2 つの古墳は、それぞれが古墳群を形成し、首長墳としての威厳^{いげん}を今日まで伝えています。

群集する古墳

古墳時代において、前方後円墳に代表される大型の古墳は、被葬者^{ひそうしゃ}自身の権勢^{けんせい}、威光^{いこう}を示す一種のモニュメントでもありました。古墳の築造は限られた人物のみに許される^{じょれつ}序列の象徴でもあったのです。しかし、古墳時代後期（約 1,500 年前）になると、首長墳の近隣に小型の古墳がいくつも造られます。これらは、『群集墳』^{ぐんしゅうふん}と呼ばれ、古墳時代後期になると爆発的に増加します。この群集墳の増加は、古墳時代の社会構造の変化とも捉えることができます。つまり、古墳が権威を示すモニュメントから、集団のお墓（家族墓）へと変化していったのです。



図6) 勝呂7号墳出土 女子人物埴輪

新たな古墳の発見 勇福寺遺跡3区

令和4年度に発掘調査された^{ゆうふくじ}勇福寺遺跡3区からは、5基の円墳の他、^{たてあなたてもの}竪穴建物を含む多くの遺構・遺物が発見されました。中でも、2号墳から出土した大型円筒埴輪^{えんとうはにわ}は坂戸市初の事例となり特筆されます。

古墳から出土する埴輪は被葬者の生前の序列を示します。この大型円筒埴輪が出土した2号墳の被葬者は、勝呂地域周辺を治める力を持った豪族（首長）であったのかもしれません。



図7) 勇福寺遺跡3区2号墳出土 大型円筒埴輪

みよしの 三芳野地域 北部 ～台地縁辺に展開した古墳文化～

みよしの
三芳野地域北部は飯盛川の北側に肥沃な低地が広がり、現在も水田が営まれています。
飯盛川と谷治川に囲まれるように坂戸台地があり、古墳群や集落が営まれています。この地域は坂戸市東部の古墳時代を語るうえで欠かせない、大型前方後円墳誕生の地でもあります。

三芳野地域北部は、隣の勝呂地域と同様に古墳時代前期（約 1,650 年前）に、台地の縁辺部周辺に方形周溝墓が造られます。古墳時代前期が終わり中期に入っても、人々の営みは続き、中期末から後期にかけて、牛塚山古墳群で円墳の築造が始まります。その後、古墳時代後期（約 1,500 年前）以降は大型前方後円墳である雷電塚古墳を筆頭に、群集墳が営まれ始めます。

谷治川の右岸に展開された三芳野地区北部の古墳文化をのぞいてみましょう。

三芳野地域北部の古墳時代の始まり

坂戸市の古墳時代前期（約 1,650 年前）は弥生時代から続く方形周溝墓が主な墓制でした。三芳野地域北部も他地域と同様に、方形周溝墓が主な墓制で、五反田遺跡の発掘調査でも見つかっています。

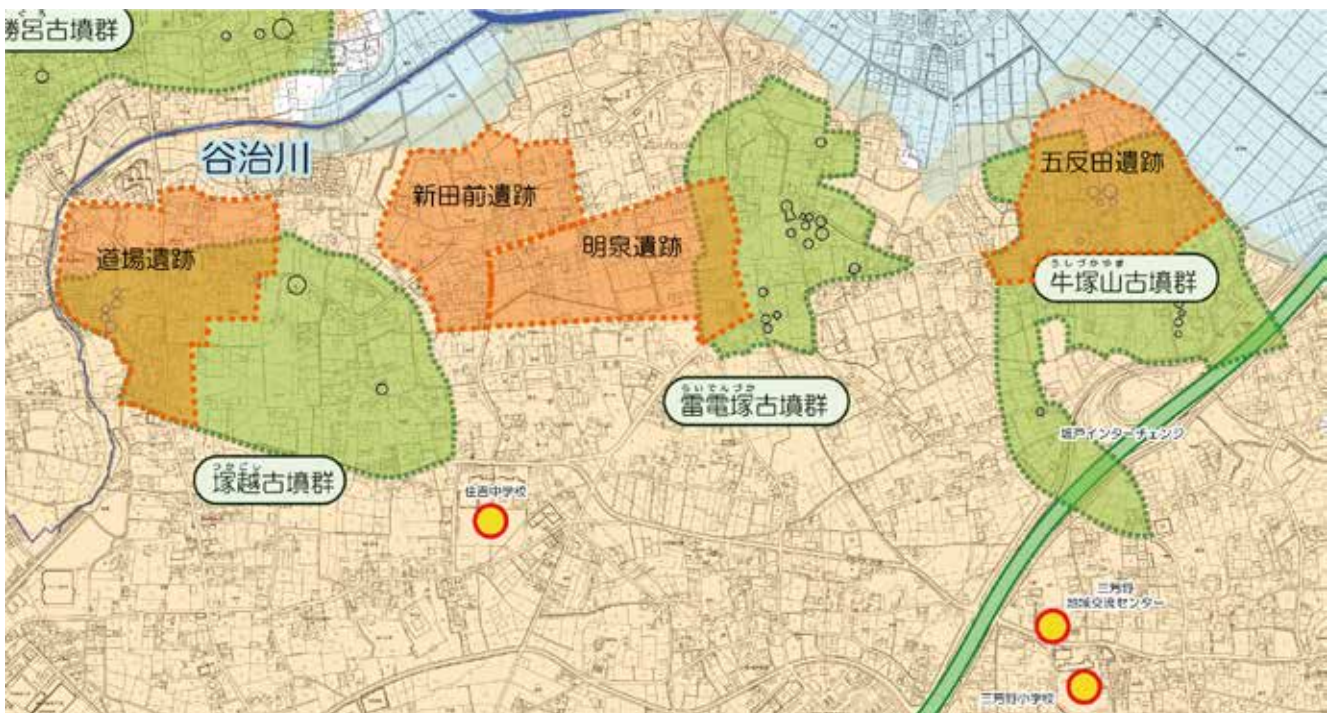


図8) 三芳野地域北部の古墳・集落の分布

その後、この地域での古墳築造は古墳時代中期（約 1,550 年前）の末頃から始まりました。基本的に円墳で構成され、^{まいそうしゅたいぶ}埋葬主体部は先に塚を築いてから穴を掘りこむ^{たてあな}竖穴系のものが使われていたと考えられます。10基を超える円墳の上に^{はにわ}埴輪が並ぶ光景は圧巻だったことでしょう。

古墳時代後期の三芳野地域北部

本地域における大きな画期は古墳時代後期（6世紀）の初めにあるといえます。現在も墳丘が残る大型の前方後円墳である雷電塚古墳が築造されたのもこの時期です。雷電塚古墳をはじめとする前方後円墳の築造を皮切りに、三芳野地域北部においても古墳の築造が活発になりました。平成24年度に調査された雷電塚14号墳では、古墳時代後期（約 1,500 年前）の^{ほたてがいがたこふん}帆立貝型古墳の可能性のある古墳が発見されています。

古墳時代終末期（7世紀）になると、^{ぐんしゅうふん}群集墳でも横穴式石室が主流になります。発掘調査で石室が明らかとなった^{つかごし}塚越2号墳では、^{どうぼりがた}胴張型横穴式石室から^{こんどう}金銅製の^{じかん}耳環や鉄製品などが出土しました。



図9) 雷電塚古墳 全景

古墳を作った人々と集落

前方後円墳や群集墳を築造に関わった人々は、近隣集落の住民と考えられます。三芳野地域の発掘調査では、塚越古墳群に対応する^{どうじょう}道場遺跡や、雷電塚古墳に対応する^{しんでんまえ}新田前遺跡から、古墳時代中期から古墳時代の終わり（約 1,550 ～ 1,350 年前）にかけての、古墳の築造と同時期の集落が発見されています。また、雷電塚古墳群に隣接する^{みょうせん}明泉遺跡は、古墳時代の後期（約 1,500 年前）頃から始まる集落で、奈良時代以降も人が住み続けた痕跡が見つっています。

古墳を作った人々の営みは小地域ごとに^{せいすい}盛衰があり、三芳野地域の北部は谷治川を挟んで対峙する勝呂地域と類似した動向を示します。それは、首長墳と群集墳の関係性です。胴山古墳や雷電塚古墳などの大型古墳は、それぞれが群集墳を形成し、連綿と築かれた古墳の系譜は、コミュニティの歴史を反映するものとなっています。

三芳野地域 南部～古墳社会を支える土器づくりのムラ～



図 10) 三芳野地域南部の古墳・集落の分布

坂戸市東端部を流れる大谷川の両岸と小畔川左岸の台地上の古墳時代は、約 1,700 年前の古墳時代初頭頃から幕を開けます。大谷川両岸に^{たてあな}堅穴建物が点在しはじめ、中には有力者の居宅とみられる大型の堅穴建物も確認できます。また、出土している土器をみると東海や南関東、滋賀県近江地方の特徴を持つものが確認されており、当時の人々の文化交流が広範だった様子を物語っています。

^{ぼい}墓域は台地縁辺の川沿い形成されており、発掘調査で^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が複数発見されています。

谷治川沿いの低地部が水田ならば、農作業の傍らふと顔を上げた村人の目には、台地縁辺に整然と並ぶ先祖の墓と、その奥の集落から上がる炊飯の煙が見えていたのかもしれません。

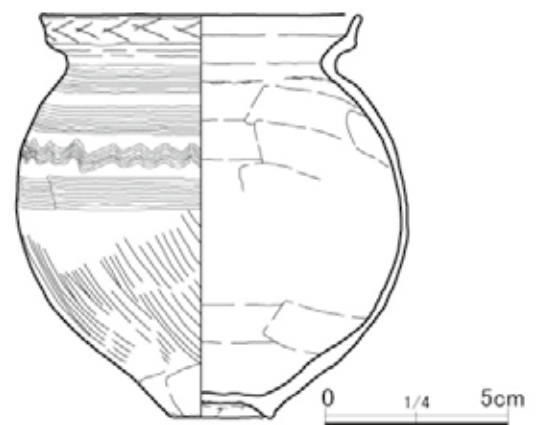


図 11) 近江地方の特徴を持つ小型甕

古墳時代中期後半（約1,550年前）になると、大谷川右岸を中心に集落が形成されます。これまでの調査で約100棟もの竪穴建物が発見され、古墳時代中期から終末期までの約300年間存続していた集落の存在が浮かび上がってきました。また、発掘調査成果を分析することで、このムラの主な生業が「土器づくり」であったことが明らかとなりました。

古墳時代における「土器」はただの「食器」ではなく、それぞれの地域が異なった形、色調のものを使用し、集団の結束を示す一種の装置となっていました。殊に比企入間地域では、赤い顔料（ベンガラ）が塗られた特徴的な土器が積極的に使用されており、このムラは比企入間地域における「赤い土器」の製作拠点の一つとなっていたようです。

このムラの南側には、彼らのリーダーであった在地首長層の墓域「下小坂古墳群」が広がっています。発見された豊富な副葬品の数々は、当時この地域が重要な政治的位置付けにあったことを物語っており、土器づくりはその一翼を担う「産業」の一つであったと考えられます。



図12) 上谷遺跡と周辺遺跡における調査成果

おわりに

4人の学芸員それぞれの切り口からご紹介してきた、4つの小地域の古墳時代の動向を比較してみると、地域ごとに個性豊かなあゆみをたどってきたことが分かります。

古墳時代終末期を経て律令社会への転換期を迎えると、中央集権的な政治体制の影響によって、地域社会もより均質なものと変化していきました。暮らしの器^{うつわ}ひとつをとっても、古墳時代以来の伝統をひく土器は衰退し、どの集落でも一様^{いちよう}に須恵器^{すえき}が使用されるようになります。

その一方で、新たな政治体制のもと、埼玉県内最古級の古代寺院・勝呂^{すぐろ}廃寺^{はいじ}や、古代官道^{とうざんどう}・東山道武蔵路^{むさしみち}といった、坂戸市を代表する数々の遺跡が生み出されました。ひとつの地域の中で、古墳時代からの古代への連続的な変化を追うことができる事例は少なく、坂戸市の歴史を特徴づけるものとなっています。

昨年度・今年度と2回の展示にわたって紹介してきた古墳時代の各地域のあゆみは、次なる時代の郷土が放つ輝きの源泉にもなっているのです。

主要な参考文献

- 赤熊浩一 1994『金井遺跡B区』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
赤熊浩一ほか 2011『反町遺跡II』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
安生素明加藤恭朗福嶋正史 2016『宮裏遺跡3宮裏遺跡9・10区発掘調査報告書』坂戸市教育委員会
加藤恭朗吉澤学 2015『宮裏遺跡2土屋神社西遺跡・宮裏遺跡22区・28区発掘調査報告書』坂戸市教育委員会
加藤恭朗小林朋恵安生素明 2017『宮裏遺跡4宮裏遺跡13区・14区・15区発掘調査報告書』坂戸市教育委員会
かみつけの里博物館 1998『第2回特別展 人が動く・土器も動く』
川越市立博物館 2015『古代入間郡の役所と道』
埼玉県 1982『埼玉県史資料編2原始・古代弥生・古墳』
酒井清治ほか 2017『勝呂神社古墳第1次発掘調査概報』駒澤大学考古学研究室坂戸市教育委員会
酒井清治ほか 2018『勝呂神社古墳第2次発掘調査概報』駒澤大学考古学研究室坂戸市教育委員会
坂戸市 1992『坂戸市史古代史料編』
坂戸市 1992『坂戸市史通史編I』
櫻井準也 2017「18世紀初頭に修復された被災古墳―埼玉県坂戸市浅羽野1号墳の事例から―」『尚美学園大学総合政策論集』24号 尚美学園大学総合政策学部総合政策学会 pp.37-47
澤口和正 2008『宮裏遺跡宮裏遺跡発掘調査報告書I』坂戸市教育委員会
昼間孝志大谷徹 1998『新屋敷遺跡D区』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤野一之小林朋恵 2020『新町遺跡3区・4区・5区』坂戸市教育委員会
藤野一之ほか 2023「埼玉県坂戸市桐山古墳の研究」『駒澤考古』48 駒澤大学考古学研究室 pp.57-84
山本良太宮田忠洋 2021『山田遺跡19区』坂戸市教育委員会
山本良太宮田忠洋 2023『上谷遺跡16区』坂戸市教育委員会

用語解説

【甑こしき】

調理器具の一種。お湯を沸かした甕わの上に据え、蒸気を利用して食材を蒸す。

【須恵器すえき】

古墳時代に朝鮮半島から伝わった硬質こうしつの焼き物。焼き上がりは灰色～青っぽい灰色。

ロクロを使って成形し、登り窯のぼりがまにつめて焼成する。

【堅穴建物たてあなたてもの】

地面に掘られた穴の上に屋根を葺いた半地下式の建物。「堅穴式住居」とも呼ばれる。

住宅として使うほか、工房や作業場としても使われる。

【坏つき】

皿よりも深い器。脚がつくと「高坏たかつき」になり、より深いボウル状になると「碗わん」と呼ぶ。

【鉄滓てつさい】

金属を溶かしたときに出る不純物ふじゆんぶつのかたまり。

【土師器はじき】

古墳時代～平安時代に作られた素焼きすやの焼き物。焼き上がりは赤茶色～橙色。

【甕はそう】

壺つぼのような形をした、液体を入れる器。穴に竹などを差し込んで急須きゆうすのようにして使う。

【埴輪はにわ】

古墳の墳丘や周囲ふんきゆうに飾られる素焼きすやの焼き物。

シンプルな筒状の「円筒埴輪えんとうはにわ」と、人物・動物・道具などをかたどった「形象埴輪けいしょうはにわ」がある。

【平瓶ひらか】

平たい壺つぼのような形をした、液体を入れる器。

【方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼ】

弥生時代のお墓の一種。坂戸市周辺では古墳時代に入ってもしばらく採用された。

四角く掘った溝の中心に古墳よりも低い墳丘ふんきゆうを設け、亡くなった人ほうむを葬る。

【紡錘車ぼうすいしゃ】

糸をつむぐときに使う「紡錘ぼうすい」という道具の一部で、錘おもりの部分。

中央の穴に軸じくとなる棒を通して回転させ、その勢いで糸をつむぐ。

【掘立柱建物ほったてばしらたてもの】

柱穴に柱を据えて建てる建物。

平安時代までは、倉庫や官衙かんが（役所）といった特別な建物だけに採用された。

【横穴式石室よこあなしきせきしつ】

亡くなった人を古墳に葬る施設である石室せきしつの一種。

石材を使って組み上げられていて、あとから複数のなきがらを収める追葬ついそうが可能。

坂戸市周辺で普及するのふきゆうは古墳時代終末期。

坂戸台地における主要古墳群の変遷

今回の展示で紹介するもの

紹介しないもの

前期 1650年前	浅羽野・坂戸地区	勝呂地区	三芳野地区
花影・宮裏 方形周溝墓群 		勝呂 方形周溝墓群  勇福寺 方形周溝墓群 	景台・高窪 方形周溝墓群  五反田 方形周溝墓群 
中期 1550年前		勇福寺  新町  勝呂 	雷電塚  牛塚山  下小坂 
後期 1500年前	浅羽野  新山  片柳 	胴山古墳  勝呂神社古墳 勝呂廃寺 	雷電塚1号墳  塚越 
終末期 1350年前	土屋神社古墳  新山2号墳 		

※古墳の年代については推定のもも含む